



仙仁司（せんに・つかさ/1943-）は 1971 年から緩やかに個展を開催している。近年の作品の主題は宮沢賢治であり、今回の個展では「賢治界」と題した紙にオイルパステルの作品を、大小併せて 22 点、発表した。



山形生まれの仙仁が花巻生まれの賢治に拘るのはその地域性よりも、仙仁が早稲田大学大学院において安藤更生に師事した点に私は注目する。安藤更生（1900-1970）は会津八一（1881-1956）に師事、会津が明治から昭和初期に確立した日本美術史の方法論を中国美術にまで拡大し、現代の東洋美術史の基礎を形成したと私は認識している。



賢治の持つ法華經の思想を安藤が持つ視線によって洞察し、自らの作品として顕然させる。そのような手法を仙仁が取っているのではないかと私は憶測して止まない。安藤が見た法華經の世界と賢治のそれを比較するつもりは一切無い。重要なのは、今日の学問が失った精神性なのだ。



仙仁の作品に何が描かれているのか。それは人体であり、蓮華であり、連続する未見の実体無きフォルムであろう。しかし問題なのは、画面と描かれている距離にある。この画面に、この内容が描かれる意義は一切省かれている。描くこととは何かという問題定義すら失われている。

当然、気になるのは桃色の画面構成だ。私は賢治と法華經について全く明るくないのだが、必要に応じた最小限の知識を投じてみると、少なくとも賢治にとっての桃色とは、夜明けを指している。では黎明とは、夕暮れとは何か。

桃色は肉の色ではなく肌の色、そこには血が廻り不可思議な模様が浮き上がる。仙仁は東洋的な思想というよりも、より一層、現代の私達の様相や自画像を無意識に描いているのではないかと考えてならない。

なぜならばそこには私達が失った/失われた曼荼羅の「欲情」「欲求」「欲望」が隠されているからだ。逆説的な意義を唱えて満足するわけにはいかない。しかし、眼の前に佇む現実と意識を裏切るわけにもいかない。仙仁が描いているのは絵画か、それを越えた絵画か。では、絵画とは何か。

